

【研究報告書要旨】

若手教師を育成する校内支援体制

～P 小学校の事例を中心に～

熊本大学大学院 教育学研究科
教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース
221-A9075 清水 修

本研究の目的は、若手教師が仕事を続けられる環境づくりをすることである。ここでの仕事を続けられるとは、第 1 に離職など、教師を続けられない状況に追い込まず、若手教師が組織に適応できることである。第 2 に学級経営や授業を進められるようになる知識や技能を身につけられることである。

昨今、若手教師の離職率が高い現状があることや新規採用教員の自殺などの事例から学校が若手にとって非常に厳しい状況にあることがわかる。学校現場が若手にとって適応しにくく、成長しにくい場所になっている。その要因として考えられるのは、教師の年齢バランスの問題、教師の多忙化、生徒指導の難しさなどである。先行研究の検討の結果、若手教師が学校に適応し、成長していくには、学ぶ場の設定、学ぶ時間の確保、教師間のコミュニケーションの 3 点が重要であると示唆された。

そこで P 小学校で実践する内容を、上記の 3 点を満たす、「インフォーマルな学習会」と「先輩教師による授業支援」とし、教師のスキルと知識の伝達を目指した。「インフォーマルな学習会」を「P 小カフェ」と名づけ、学びやすい時間設定、参加しやすい場の工夫、若手のニーズに合わせたテーマ設定で進めた。また、同僚性を高めるために少人数でのグループ活動を中心とした。「先輩教師による授業支援」では、授業参観への若手教師の抵抗感を減らすために、先輩教師による「授業参観」から、一緒に授業を進める「授業参加」に変更した。

上記の 2 つの実践の結果、「インフォーマルな学習会」は、若手教師にとって参加へのハードルが低くなり、若手同士や先輩教師との交流の中で同僚性が高まり、そこで学習したことを若手が実践に活かしたことが確認された。「先輩教師による授業支援」では、先輩教師の授業内外での支援を受けて次の実践に活かしたり、先輩教師の子どもとの関わりを見て自分の実践を振り返ったりする若手教師の姿が見られるようになった。どちらの実践にも見られたのは、若手教師の意欲の高まりと主体的に動き出す姿であった。学ぶ時間、学ぶ場、教師間のコミュニケーションがうまくリンクすることで若手教師が組織に適応し、成長することができたと考えられる。